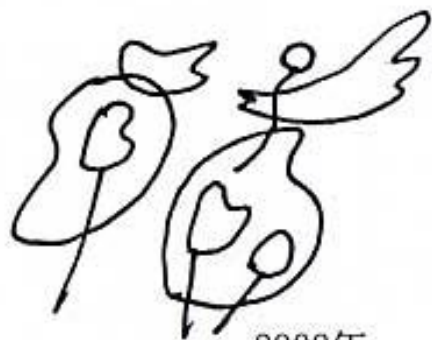


空



2008年

SORA 23号

晴
夜

(23)

—
1

柴
田
佐
知
子

断崖を風吹き上がる立夏かな

火を囲む海女のけぞりて笑ひけり

梅干して死に絶えしごと昼の村

枇杷啜るうしろ土蔵の闇があり

怠りて生死も淡し柚子の花

刺青の背より抜け出し夜の蜘蛛

断念の涼しき顔となりにけり

—「俳壇」七月号より—

青
柿

高倉和子

正面に手強き山や胡瓜もぐ
青空の中に顔入れラムネ飲む
べたべたと闇が張りつく網戸かな
井戸水を飲みて元気な頃の夏
青柿や父は痛みを口にせず
国盗りの甲冑黒き大暑かな
風の音ばかりとなりぬ青田道



空の句会の時、柴田主幸の選評が終
わったあと、私の方から「何か質問はあ
りますか」と聞く。最初のうちは遠慮さ
れていたのかあまり質問はなかりたが最

涼しくて本当のこと話しけり

茅の輪くぐりて面白きこの世かな

夏芝居女膝より泣きくづれ

ふるさとの川の話も暑氣払ひ

昼寝覚母の膝より戻りけり

蝉こつと落ちて小さき芥かな

香水やくるくる動く女の眼

遠泳の裏も表もなく戻る

煌々と灯れる船も晩夏かな

潮筋の沖まで見ゆる盆の入り

近はみな活発に色々なことを質問されるようになった。

先日のお会で「先生の入選にも入らなかった句は捨てた方がよかですか」という質問があった。柴田主宰は「表現方法や季語を再考すれば良い句になるものもありますので全て捨てる必要はないと思います」と言われた。「でも作り変えるにしてもどこがどうして悪いかがようわからんので説明してもらおうと勉強になります」という言葉を受けて、主宰が入選句以外の句について丁寧に説明をされた。「この句は格好付けすぎですね、これは説明だけに終わっています、この句は眼の付け所は良いのもう一度作り直して下さい」など。

私の句も例に漏れず厳しい指摘を受けたが、言われてみればその通りで、反省しきりであった。皆、それぞれに持ち帰った句が今後どのように生まれ変わって句会に登場するのか楽しみである。

優曇華

中田みなみ

木の枠の窓開けてあり簾

提灯の家紋伸ばして祭待つ

白南風や魚網で圍ふ放ち鶏

海女どちの腹から笑ふ雲の峰

赤銅の腕幣振る魚祭

もんぺ売る店で水呑む祭馬

女学校時代の通学路は池袋が乗り換え駅であったが、私は家を三十分早く出て、伯父の営む池袋のトキワ通り角の井盛堂書店へ猪進した。丁度その時刻は日本出版KKのトラックが着き、小僧さん達が荷縄を剪っている。私が素早くその中から新刊書を抜き取ると、伯父はカバーをして呉れ乍ら『髪の毛やフケを落すなヨ。鼻クソを丸めて入れるナヨ』などと言う。伯父夫婦は子供が無く、私は一番最初の姪であったので非常に可愛がられ、大抵の我儘は許されていた。出来得れば下校の際返本しなければという気があるので、電車の中は勿論、休み時間も読み続け、時には伯父の家で夕食を済ませて返本する事もあった。そのせいか、私は読むのが実に早いという特技を身に付けた。

クラスの中にはポケットにいつも英单を忍ばせている人、「春はあけぼの」や

深閑と盆に入りたる魚市場

積湯へ案内の螢現れし

川舟に乗る相談の竹床几

優曇華の障子に凭れ雲を追ふ

青簾露地抜けるとき時計鳴り

籐椅子に隔離されたる男かな

待つともなく次の滴り返り見し

蟻地獄孤独地獄を嘆くかな

野へ曲る道を知る犬夜の秋

漢文の「赤壁の賦」まで滔々と暗唱する人もいたが、私はかい摘んだ勉強法で過ごし、確かツルゲーネフの「初恋」だったかに、檜の木は春、新芽がうづいて来るとやつと古い葉が落ちる。再びの恋もまた同じだ」という一節がいたく気に入り、隣席のガリ勉の優等生に聞かせた上、林芙美子の小説を無理に押し付けた。過日後、その友人は返却しながら『アノネー唇を封じたつていうところあったけど、何のこと?』と周囲の人の注目を引く程大きな声で訊いた。私はマセていたので即、教えて上げた。こんな女学生もいたということ、今の子には信じ難いだろう。

十七・八才位の時だったろうか、よく注文に見える紳士を伯母が富安さんと呼び、私に俳句の先生なのよとささやいた。その時の私は何となく畏敬の眼を向けたに違いない。後日、棚から抜いた一冊の中から私は「鶴鴿のよけて走りし落椿」を見つけた。あの穏やかな紳士が富安風生先生と知ったのはずっと後のことで、此の鶴鴿の句は私が俳句というものを意識した最初の句であった。

空作品評

柴田佐知子

正確に春の来てゐる機の音

樋口みのぶ

「正確に」と思い切りよく詠み下ろすことで、「機の音」が生み出しがちな湿った情感を削り、さつぱりとした味わいを醸している。尚、みのぶさんの作品へ紙雛まなこ入れれば笑ひけり」が俳人協会全国俳句大会の秀逸賞と選者特選賞を受賞した。

団塊の我らの老後若葉寒

中条さゆり

年金や医療など問題山積で先の見えない現代。この現状を俳句に詠みとるのはなかなか難しい。標語や新聞の見出しのようになってしまふからだ。ところがさゆりさんは自分に引き寄せて諧謔の効いた鮮やかな作品とされた。一斉に停年を迎える団塊の世代の一員たる私にこの若葉寒は身に沁みるのだが、読後思わず笑ってしまった。「我らの老後」がいい。

卓袱台でこと足りし日や夏の星 大地 真理

「こと足りし」によって、食事は勿論、縫物をする母、新聞を読む父、勉強する子供などいろいろな情景が呼び起こされる。生活の中心に家族が囲む卓

袱台があつた頃を懐かしむしみじみとした作品。

放つこと思つてばかり螢籠

青木 朋子

籠の中で青く光る螢の火。美しいと思つてもその生命の明滅を見ていると心穏やかではいられなくなる。「放つこと思つてばかり」という作者の思いの向うに、はかない命が詠みとめられている。

梅雨最中物体となり手術受く

森 紀子

何もかも放下して手術台に横たわる姿を考えると「物体となり」の措辞がいかに的確であるかがわかる。「梅雨最中」という言葉も衝撃をもつて響く。

はしたなく見られもしたり浮人形

堀江 惠子

逝きし子の服着せ立つる案山子かな 長田 憲一
堀江さんの浮人形、長田さんの案山子には驚いた。浮人形は生身の如き存在感を有し、亡き子の服を着た案山子は冥界に立っているかのようで胸に迫る。

もういいの過去を平らに酔芙蓉 及川木栄子

生きていれば誰にでも山や谷があろうというもの。「もういいの」と掌で一撫でしたように、すると平らにした所が凄い。酔芙蓉が艶である。

空集

柴田佐知子選

捻子を巻く生家の時計昭和の日

福岡

中条さゆり
ちゆうじょう

一日を若葉三昧寝つかれぬ

植ゑられて棚田千枚海に落つ

団塊の我らの老後若葉寒

雨はじく紫陽花の葉の蠢ける

「神の窟」てふ集落や梅を干す

やすやすと齡は取るまじ桜の実

ほうたるへ道の真ん中歩きけり

恋を得ずほうたる風に流されし

春の鴨己の岩を一つ持ち

福岡

吉村 撰護
しやうご

玄海の波新しき立夏かな

抜き差しのならぬ棚田の代を掻く

箱めがね海引き寄せて覗きけり

夜振火を突きつけられし川の闇



夏鶯入植部落つひに絶え
蚊の姥が足忘れゆく網戸かな
満月に声つき入れてほととぎす
一夕を神楽に遊び灯涼し
行橋
安武しんこ晨子

吊橋にはじまる秘境朴の花
闇を出て闇にかくるる螢かな
萬緑の峽や方位を見失ふ
台風のわたる始終を雑木山
水中花ほどの自由を許さるる
一病を白紙にもどしたく泳ぐ
髪染めて夏に負けたること隠す
竿太し太郎次郎の初幟
上げ潮の思はぬ速さ浅蜷籠
英単語ぼるぼる忘れ都草

福津
野畑小百合